

## 総評運動と社会党と私

—富塚三夫氏に聞く（上）



### はじめに

今回は、元国労（国鉄労働組合）書記長、総評（日本労働組合総評議会）事務局長の富塚三夫さんをお迎え致しました。国労の、特にスト権ストの中心的なリーダーとして指導されました。連休のど真ん中をお願いをし、皆さんも出席いただき、ありがとうございます。法政大学は大学祭の真っ最中であり、多少騒音が聞こえるかもしれません。早速ですが、ひとつよろしくをお願いします。

**富塚** こんにちは。私は1929年生まれで、もう84歳です。まさに高齢者になり、耳がちょっと遠くなりました。最初はもっと大きなテーブルかと思ったものですから、補聴器は入れています。でも、できれば正確にお答えするには、質問のときにはメモしていただければありがたいと思います。

率直に言って、1975年ですから、スト権スト以来、もう38年もたっているわけです。雑

本稿は、2013年11月3日（日）、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階、円卓会議室において行われた「社会党・総評史第10回研究会」の記録である。出席者は、有村克敏、五十嵐仁、岡田一郎、鈴木玲、芹澤壽良、園田原三、南雲和夫、浜谷惇、細川正、前田哲男、橋田大知彦、木下真志であった。事前に富塚氏宛に送付した質問に答えていただいた部分（本稿）と質疑応答（次号）とに分けた。読者の便宜を考慮し、中見出しを付した。（木下真志）

誌『労働レーダー』は、代々木に小さい事務所を持ってちんたらちんたらしていたものですから、スト権ストの意味するものということで書いて、30年たってから載せてもらいました\*。もう高齢者になったからいいだろうと思うのですが、今日はそのときの内幕ですね、相手とどのようにしたかということを申し上げます。

私は福島県と宮城県と山形県の県境の、羽州街道の峠の下りたところ、原発から80キロぐらい離れたところに生まれました。先祖は伊達藩の家老の富塚内蔵介重信で、山本周五郎の大河ドラマ「樅の木は残った」に出ましたが、先々代が放蕩生活をして、8人兄弟は貧乏生活を余儀なくされました。私は8人兄弟の3番目の男で、姉が1人おります。結局、国民学校を出てすぐ、14歳で鉄道に入りました。鉄道に入って鉄道教習所を出て旧制中学の認定試験を受け、認定をもらって東鉄（東京鉄道管理局）に転勤します。それで明治大学の夜間部、二部に入るのですが、ちょうど組合運動の専従者をやっているほうが、通学するのに非常に都合がいいということもあって合理的に考え、一応組合の専従生活を続けながら明大に通って出させてもらいました。今の菅義偉官房長官もまるっ

\*富塚三夫（インタビュー大橋弘）、「いま『スト権スト』を話そう」1998年1月号、「いま総評労働運動の苦悩を語る」同年3月号、『労働レーダー』労働問題研究会議。

きり私なんかと同じ生き方で、秋田から出て皆さんの学校の法政大学の二部を卒業され、いま影の総理大臣と言われるぐらい、ものの捉え方、考え方、そういうものを上手に発表されている方であります。

14歳で国鉄に入ったときに、国鉄官僚のキャリア組、25～26歳の仙鉄（仙台鉄道管理局）の課長が藤田の駅を視察に来ることになった。3日3晩も寝ないで屋根裏まで掃除したのに、「ご苦労さん」の一言も言わずに帰っていった姿が今でも思い浮かびます。私が組合指導者となり、官僚に抵抗するのはそういうことが原点にあります。貧乏生活の中でそういうことが培われてきたと思いますが、一面では合理的に考え、組合活動の専従生活から社会党の国会議員になって当落を繰り返しました。海千山千の男だと言われたこともあります。波瀾万丈の人生であったわけです。それだけにいろいろな裏側をよく知り尽くしているつもりでありますので、今日は表題とともに裏側のそういった問題も皆さんに申し上げてみたいと考えます。

### 日本社会党衰退の要因

最初に、何といたっても社会党と最近の民主党の動向です。なぜ社会党がこれまで衰退をしてしまったのか。これは以前、曾我祐次さんなど

も来て話された（本誌664・665号参照）と思いますが、総評がなくなったからだと言われます。私も大体そのように思っています。ご案内のように、社会党は1955年の10月13日に左右の統一大会を開きます。総評は1950年の7月11日に結成されたのですが、以後ずっと社会党支持を決めてきました。当時の社会党は、「3分の1政党」を超えられないとずっと言われてきましたが、国会議員の中心はほとんど総評、官公労出身の人たちで占められていました。一時（1958～1960年）は衆参で250名ぐらい議席を持ったこともあります。力のある大半の議員はほとんど総評、官公労出身の議員でありました。国労出身だと、楯兼次郎、横山利秋、下平正一、野々山一三など、まさに力づくでやるような人たちがみなリーダーになっていました。全通からは田辺誠さん、自治労からは村山富市さんなどが出て、社会党の議員はほとんど官公労（日本官公庁労働組合協議会）中心の議員が占めてきたわけです。

51年の第2回大会で総評は「平和四原則」の採択をします。三井三池闘争のストライキの支援。軍事基地反対。原水禁運動。それから、安保条約では左右が分かれていましたが、そういう政治的な課題で実は社会党と総評は一体となって闘ってきました。そういう中で「3分の

#### 富塚三夫氏 略歴

1929年 福島県国見町小坂に出生  
1943年 国見町国民学校卒業 国鉄（東北本線藤田駅）に就職  
1945年 国鉄仙台鉄道教習所電信科及び中等部に入所  
1948年 同上卒業  
1952年 仙台鉄道管理局より集団転勤列車で東京鉄道管理局へ 東京電務区勤務  
(1952年2月 大学入試資格検定試験合格、同年4月明治大学政経学部（2部）入学、1955年3月同大卒業)  
1954年 国鉄労働組合新橋支部青年部長

1956年 同書記長  
1958年 国労東京地方本部書記長  
1960年 同委員長  
1970年 同本部企画部長  
1972年 同書記長  
1976年 総評事務局長  
1983年 衆議院議員に当選（神奈川五区）  
1990年 日本社会党国際局長  
1993年 落選 引退  
2009年 ポーランド大統領レフ・カチンスキ（当時）より、「十字型功労賞」授与

「1 政党」を超えようとしなかったというところがやはり、官公労出身の議員の器だったのではないか。一つはそうのように思います。つまり、自分のバッジを守る、城を守るというところに執念をもってやっていたように思われます。

結局、総評がなくなり、社会党応援をする勢力が地方でなくなってしまった。実は私たちの時代までは、地区労という地域労働組合の協議会をつくり、国労、全通などをはじめ官公労が中心になり、鉄道労働者などは泊まりと明け番がありますから、行動の先頭に立ち、ほとんどその政治活動の拠点として活動をしてきたわけです。市民団体にも共闘を呼びかける。そして政治的な活動を展開する中で、選挙の応援をしてきたのです。その拠点がなくなったことが、社会党がだめになった原因だと私は断定していると思います。

いま連合（日本労働組合総連合会。日本最大の労働組合のナショナルセンター〈労働組合の全国的連絡協議組織〉。1989年発足）になって、そういう拠点は形式的にはありますが、ほとんど活動はしていません。今度の民主党の敗北の中で、この前、上智大の中野晃一先生など若手グループ（日本再建イニシアティブ）が『民主党政権 失敗の検証—日本政治は何を活かすか』（中公新書、2013年）というものを発表され、マニフェスト政治の失敗、あるいは統治能力の欠落など細かくいろいろ挙げられています。問題は、民主党の国会議員になって政党を引っ張ろうとする人たちも、政治活動の拠点というものをしっかりつくろうとしないということです。自分のパフォーマンスだけで当選をしようとする。具体的には拠点が無いから、そのときの風に左右されて失敗をしてしまうことになるわけです。メディアなどへの対応も下手だし、いろいろな意味で活動をしていないからメディアにのせる材料もない。基本的には民主党

政権なども地域に政治活動の拠点をつくっていない。選挙活動をする人たちをしっかりと押さえておかない。そういうところが欠落していたことが、民主党も社会党も今日を招いた原因であろうと私は思っています。

もう一つは、議員の人たちはカネのかかることを意外に言わないのです。国民からは、「もっと身を削る思いをするぐらいの改革をせい」なんて言われればなしですが、やはり政治にはカネがかかる。ところが、会派に交付される立法調査費や新たにできた政党助成法による交付金だけの問題ではどうにもならないのです。あれはほとんど党の運営のほうに向けられてしまう。

#### 回顧 初当選の頃

そこで私も経験があるのですが、例えば私は総評事務局長から、3期6年やったので代われと言われて、故平林剛さんのあとに神奈川5区という、同級生も知っている人も全然いないところに飛び込んだ。当時、マスコミにちやほやされていた時代ですから、知名度を活かして神奈川に行って立候補したわけです。東京から100キロぐらい離れている神奈川の5区、小田原とか平塚あたり（他に、厚木市、秦野市、伊勢原市、箱根町、真鶴町、湯河原町）ですから、ここはもっと革新的な意欲があるのだろうと思っていたら、そうじゃないんですね。

例えば、今ごろ小田原市ではお祭りがあります。81の自治会があり、そこへ全部酒を1本ずつ持っていく。ところが、奥にいた町内会のボスが出てきて、「先生、酒1本じゃだめだよ。よその先生は1万円だよ」とでっかい声で言うわけです（笑）。酒1本ととっても町内会の秋のお祭りだけで81本用意するのですから。さらに、冠婚葬祭にも銭を出さざるを得ない。また、選挙区に拠点をつくる。私設の秘書をそれ

ぞれ町村別に置く。宣伝カーを用意する。チラシも用意する。すべてカネがかかる。冠婚葬祭に顔を出す度に金一封を包み、膨大なカネがかかるのです。だから、いま運よく新米で当選し、かっこよくやっけていても、金のかかる選挙区をおろそかにすると、次はだめですよ。当選できなくなる。今まで保守党・自民党は着実にそういう城づくりを進めてきました。そういう点で社会党や民主党が決定的に劣っていたことは事実だと思います。

やはり、選挙活動の拠点は、カネをつぎ込んでやらなければうまく回らないわけです。そのところは非常に言いにくい問題であり、きれい事で済まされるわけではない。そのところはしっかりと本音を出し合って議論していかないと、社民党が再生していくという意味では厳しいのではないかと思います。有権者の意識改革も大事ですが。

そういう意味で社民党、民主党がこれから再生するには、やはり自分の選挙区や地域に政治活動の拠点をしっかりつくりつけない限り、そのときの風で当選したってだめです。それには組織をつくるために必要な、裏付けとなるカネをカンパで集められるようにする。組合を中心にカンパするところがあってもいいと思います。労組依存とかどうとか言うけど、やはりカネを拠出してもらって多様な市民運動と結合し、それを拠点にして選挙運動の展開を積極的にすることがない限り、もう社民党も民主党も政権に返り咲くことはできないのではないかと。

### 社会党と総評

私が総評事務局長のときに、社会党のあそこ（社会文化会館）の外装を直すのに5,000万かかるというので、組合がカンパしてやったこともあります。恐らく政党交付金は、党の書記の皆さんの給料や運営費で終わりですよ。それ

ぞれの候補者に30万とか20万とかやっているようなことが新聞に出っていますが、実際はほとんど自前でやらないといけない。カネを出して拠点運営をする。政治活動をして選挙に当選できるまでの活動をするのは大変なことであり、そのところは社会党も民主党も実直に反省をしてかかっけていかなければならない。地区労という地域活動の拠点を連合も踏襲してはいますが、今はサロン会議と同じで、市民とのつながりもない。運動もない。カネも集まらない。そういうことでは、いつまでたっても再生のメドが出てこない。そのように思っています。

そういう点で社会党と総評というのは、ほとんど官公労出身の人が国会議員になっているのですから、その人たちを全部当選させるために組合員が日常の資金カンパ活動をやる、また選挙活動をやることで支えてきたわけです。そこで保守の側は、官公労組織を中心とした総評がバックにあるから、これをたたきつぶさなければならぬという戦略が芽生えてきて、官公労攻撃などが始まってきたのです。

結局いろいろ調べてみると、戦後、衣食住が不足しているときに政府に要求してストを指導したのも国労です。そのままずっと、ストライキの主役を果たしたのはみんな官公労でしたから、それをつぶすためには、社会党をつぶすことと総評をつぶすことが戦略上、最も重要だと目をつけられた。吉田茂は戦後のその混乱を見て官公労をつぶさなければいけないと言って、佐藤栄作を官房長官にずっと仕上げてきて官公労、総評つぶしの戦略を練ってきた。それが実際の姿でした。

佐藤栄作は国鉄出身の官僚です。そして、国鉄の磯崎副総裁などに命令して、国労（国鉄労働組合）をつぶさないか、動労（国鉄動力車労働組合）をつぶさないかという具体的な話を持ちかけて始まったのが、これはスト権に関係し



ますが、マル生とって、生産性向上運動に名を借りた不当労働行為です。これを公然とやったことで実は激しい闘いを展開し、対決してきたわけですが、保守の側の戦略は、社会党をつぶすには総評をつぶす。総評をつぶすには官公労に照準を当てる。一貫してそのことを狙ってきました。今度は生産性向上運動に名を借りた不当労働行為。低成長経済に入ったらそれが、親方日の丸論を振りかざして徹底した攻撃をかけてきました。私は国労新橋支部、1万6,000人の書記長から6万人の東京地本の書記長、委員長もやりましたが、富塚をつぶすためには東鉄を3分割する。それで東鉄3分割反対闘争という激しい闘争を組んだ。結局、押し切られて3分割されました。そして、戦力を弱める狙いをもって磯崎総裁がやったのです。いわゆる保守の戦略などはそういう流れの中でずっと一貫してきたわけです。

### 社公連合政権構想

次に、社公連合政権構想について申し上げます。

私は佐々木更三派に属してきました。それは私を支えてくれた国労、北海道委員長の中川秀夫氏が佐々木派の中核にいた関係です。

当時は、佐々木派（左派）と江田派（右派）の対立が激しく、一方で向坂派と太田派の対立などが国労の組織内に持ち込まれ、国労は社会党内の対立を象徴していました。その時代、日本経済が低成長時代に入り、官公労は親方日の丸攻撃にあい、総評内も大きく混乱しました。

ご存知のように、その時期に江田三郎氏が先頭に立ち、「江、公、民」を中心とする政権構想をぶち上げました。私たち総評執行部は、この混乱をなくすために社会党内の団結を真剣に考えた結果、「社公政権構想」を考えていたのです。ちょうどその頃、「江公民」の政権構

想に執念をもっていた東海大学総長の松前重義（1901～91）氏から、連日のように霞が関ビルの総長室に呼ばれ、「富塚君、社公政権をつくらなければダメだ」と激しく言われました。社会党のバックにいる総評が積極的に応援してくれと要請されたのです。私は親しい間柄にあった公明党の矢野絢也書記長に松前さんの意図を伝えたところ、「社公政権構想」に同意をえました。

しかし、民社党、同盟（全日本労働総同盟）の立場は総評や社会党左派には乗れないと反発し、紆余曲折を経て最終的に総評の考え方として公明党さんに了解を求めたのです。矢野さんをはじめ公明党も「その構想ならいい」ということで、榎枝元文議長と私は、早速、社会党本部に申し入れ、社会党内でも議論していただき、協会系の北山副委員長にオーケーをもらい本格的に取り組むことになりました。

ところが、民社党と同盟さんは、社会、公明両党にイニシアティブをとられることに反対し、社会党内でも向坂派と太田派の対立が激しくなり、結局は日の目を見ませんでした。

私は若い国労組合員時代、世田谷のはずれに住んでいましたが、当時の創価学会の地道な地域活動をみて感動を受けた一人です。「社会党はいったい何をやってるんだ」というふうに率直に思いました。そして、「共創協定」という、共産党と創価学会の締結した協定内容を見て感銘を受けました。だから、社会党と公明党とが協調することは、社会党左派の人も理解してくれるだろうと思っていました。結局、左右両派の反対を受けてうまくいきませんでした。このときの「社公政権構想」は幻に終わりましたが、その後、矢野さんを中心に「21世紀クラブ」を麹町につくり、各界のリーダー、さらにマスコミ関係のOBの方々も参加して政権構想など議論してきました。総評も金を出し、積極的に

参加しました。矢野さんが創価学会から追放されることになり、解散いたしました。私は、当時の野党第一党の社会党と第二党の公明党が自民党に代わる政権構想を打ち出すことは、社会的にみて当然であるという考え方を持っていました。

### スト権スト 1

次に、スト権ストに入らせていただきます。雑誌『労働レーダー』（2006年1月号）に載せてもらったのは皆さんは見ている（会場配付資料—「あれから三〇年：スト権ストの意味するものは」）と思いますが、そこにあるように、最後にスト権回復を支持する会というのを公労協（公共企業体等労働組合協議会）が呼びかけ、当時、文化人、学者の皆さんにもご協力をいただきました。私は実は国労時代から、労働法学者である法政大学の青木宗也先生（1923～95、元法政大学総長）にお世話になりました。スト権の回復を支持するという意味で、こういう方々に協力していただいたことも事実であります。

先ほど言いましたように、保守の戦略として、国労をつぶして総評をつぶす。そして、社会党を後退させるというねらいがありました。相手側がそういう戦略を着実に進めるための不当労働行為などやってきましたが、それに対抗して、昭和30年代ぐらいに総評が順法闘争というものを始めます。岩井章さんの時代でしたかな。それによって、首を切られる、三役が解雇されるというので国際労働機関（ILO）に提訴し、国際機関で勧告してもらおうことをいろいろ考えてやりました。そのILOに提訴するときに労働法学者の皆さんにいろいろ協力をしていただいたわけですが、ILOから実情調査調停委員会の調査団としてドライバーという人が来て勧告をし、そのドライ

ヤー勧告を受けて日本政府は、政労使の代表が出て話をするという、公制審（公務員制度審議会）をつくります。それを岩井事務局長がオーケーと言って、労働基本権回復の問題を公制審に委ねてしまった。それが失敗のもとです。

公制審は、政労使の三者構成ですから、労働者にむけて使用者と政府が一体になりますから、いつまでたっても結論が出ないのです。それでズルズル、ズルズルと来ました。その後、国労攻撃のマル生攻撃、すなわち生産性向上運動に名を借りた不当労働行為を公然と行ってきた中で、私たち公労協は不当労働行為事案を全部取り上げ、ILOに提訴しました。そこで133次勧告というものが出て救済措置を考えるようなことが出ましたが、政府の態度ははっきりしませんでした。そういう中で結局、ズルズル、ズルズルと来たわけですが、ストライキ権を回復しなければならないという一つの流れは、公制審が空回りしていることもあるし、ILOの勧告を政府が無視したことにもあります。そうした中で、国鉄労使の間などではこのままではどうにもならないという状況に追い込まれます。そこで、ストライキ権の回復をすることによりストライキー処分—ストライキという悪循環を断ち切っていこう。そうするとスト権を回復させる以外にはない。それには条件付きだ。そういうことで長谷川労働大臣も国鉄総裁も他の会社の総裁も国会で表明して、ストライキ権を回復させようではないかという流れになってきたわけです。

それで私たち公労協80万の労働者は、もうスト権奪還は射程距離に入ったという認識で、74年の春闘のときに私の前任者、大木事務局長と二階堂官房長官で「来年の秋までに結論を出す」ということになり、75年の秋まで1年半待ったわけです。しかし、何の音沙汰もない。それでストライキをやろうと決断をして、10

日間のストライキをやることになりました。最初3日は全面的なストライキ。中の4日は少し緩和する。国労なら大阪、東京の国電を外す。それであるの4日はまた全面的にやる。3, 4, 3連ですか、そういう戦術を実は決めたわけです。大体ストライキに3日ぐらい入れれば結論を出すことができるだろう。そういうことの判断が一つの流れの中にありました。

当時、田中角栄内閣がつぶれまして、三木内閣になったんですね。三木さんはハト派と言われていて、労働者の権利にも非常に理解があると伝わってきました。

当時、永井道雄さん（1923～2000）が文部大臣で、三木さんとつながっている。それで朝日新聞の論説主幹や論説委員、それに抜群の力を持っている国鉄官僚の中樞達が、もうスト権回復以外にない、条件付きだという考え方で、そこに毎晩……。実は国労は3分の1が共産党で、細井宗一（1918～1996）という共産党の大ボスがいたわけです。その細井宗一も入れてみんなで相談し、三木内閣の情報を全部分析して、それでやろうじゃないかとなったんです。だから、ストライキをやっても、今ならとても怖くてできませんが、あの8日間、整然として、職場も混乱しなかった。みんなむしろ旗を敷いて、弁当を買ってきて、職場に籠城し、そしてやっと成功した。これは組合の指令だけではないんですよね。相手側もそういう気持ちになって以心伝心、全部下のほうに伝わっていているわけです。そういうことがあり、大体国鉄の経営者も三木内閣もいい。朝日新聞もバックでいろいろ分析してくれている。そういうことで実は私はその決断をしたのです。

ストライキに突入するに際して、そこにもありますように、三木さんは加藤寛さん（1926～2013、経済学者。国鉄を始めとする3公社の民営化に携わるとともに、10年にわたり政

府税制調査会会長を務める。慶應義塾大学総合政策学部学部長、千葉商科大学学長、嘉悦大学学長）にストライキ権のことについての答申書を書かせます。ところが、三木さんは条件付きでストライキ権をやるように加藤寛は書くだろうと思っていたら、加藤寛は日経新聞の「私の履歴書」の中で自分でも言っているように、「今、ストライキ権をやったら天下の大騒動になるから、ストライキ権をやるべきではない」と言って反旗を翻した。結局、ここが一つの屈折点というか、こういう反対の答申書が出てしまい、三木はもうやれなくなってしまったわけです。それが真相です。

だから、なぜ加藤寛が裏切ったのか、私はまだ謎であります。加藤寛は紛れもなく自分も三木さんに心酔していた。三木さんも信用していたが、それを裏切られた恰好となりました。2日目ぐらいのときですか、赤羽橋の鉄橋を右翼が破壊する。10両編成で、一列車には300人×10で3,000人が乗っていた。だから国電があそこでパーになったら、それは大変になる。警視庁からそういう情報を得て分析をして、4日目からは国電だけを動かしたのです。そういうことがありました。

完全に加藤寛に裏切られて、三木さんもやりようがなくなった。一方、田中派ですね。細井宗一という共産党のボスは田中角栄を少年兵で教えたのです。そのときに田中が、髭を生やして入ってきた。「おまえ、何で髭を生やしている」と言ったら、「目立つ存在になりたいからですッ」と言ったというのです。私は国労の企画部長でその下に中央執行委員の細井宗一がいましたが、田中幹事長でも直接しょっちゅう電話して、「あれを越後鉄道の社長にしよう」なんて田中が言っていたぐらい仲が良かったのです。それで細井宗一から田中に電話をさせたら、「うん、何とかまとめよう」。最初はそうい

う話だった。ところが、だんだん電話にも出なくなりました。「これはおかしいな」。

こうなったのは、例の三木おろしの問題にぶつかり、西村英一（1897～1987、自民党田中派初代会長）が何としても「うん」と言わない。結局は、田中派はだめになった。福田派は労働問題でも全部精通していましたから、福田派はオーケーだ。私も福田派の倉石さんと麴町の倉石事務所で会って、「富塚君、3日間、俺は長野に行ってくる。帰ってきたらケリをつけようや」と約束をした。ところが、ことごとくそれがつぶされてしまったわけです。結局、加藤寛の答申のままに三木も答えを出さざるを得なくなった。そういうことです。

三木さんも私の明大の先輩です。明大の校友会の会合のときに傍へ来て、「富塚君、悪かったな。しかし、あれだけのことをやってもこうならなかった（一人も逮捕されなかった）のは俺のせいだ」。一つはそういう流れにあったから警察も検束することができなかったと思うのですが、それが民事裁判の損害賠償補償、202億になって出てきた。それがその後の流れを混乱させてきたのです。

私も3回ぐらい殺されそうになった。毎朝、官房副長官の海部俊樹とやり合うんですね。官邸と全通本部に設けた我々の拠点とテレビの討論を毎朝やるのですが、それに出かける30秒ぐらいの差で命が助かりました。世田谷の外れのが家が焼くといって右翼の青年隊が集結したりしたので、ボディガードを警視庁に頼むわけにはいきませんから組合の若いのを連れて歩いたのですが、そういう大変なときで、「やるならやってみろ」「殺すなら殺してみろ」という気持ちでした（笑）。今ならとても怖くてできませんが、女房、子どもは田舎に疎開させてやりました。

ああいう結果になったら、富塚の思い違いだ、

富塚が勝手にそのようにやったから失敗したんだ。しかし、皆さんにも分かってもらえると思うのですが、なぜ整然とストライキがあれだけできるか。10日間予定したストの中間にあたる4日目から国電を動かしましたが、北海道まで九州まで列車が1本も動かない状態で8日間もやるなんてね。それは、経営者の側も一つの流れにオーケーを与えている。三木内閣の流れも伝わってきていたということは間違いありません。

## スト権スト 2

私は失敗したと思うのは、国鉄の官僚からもしつこく言われたのですが、私鉄並みスト権、つまり条件付きスト権ということでどうか。それが落とすどころであるということは考えていました。ところが、検討する期間を2年間置かせてくれと条件が付いてきたのです。スト権はやる方向性ですね。方向性は出すが、現実にはすぐにスト権を与えるとは言わない。そういうことになったわけです。2年間となると、結局、公制審と同じようにまるっきり逃げられてしまう。ところが下はみな燃えていて、動労さんの革マルをはじめとして変なことをしたらダラ幹粉碎で大変な目に遭うわけですから、やはりその条件は、半分拳を上げていたのですが、のむことができないままズルズル行ってしまった。

何といても一つの流れは、保守が、国労、総評、総評の中でも国鉄の組合をつぶさなければだめだという戦略ののってきたことです。そういう一つの流れの中から、田中から代わった三木内閣がそういう結末をつけてしまった。もし田中がなっていたら、「よっしゃッ、わかった」と言って、恐らく決まっていたと思うんですね。最後は田中派がずらかってしまったことがポイントですが、その点では、つくづく三木さんはだらしがない政治家だった。三木さんに嫌みも



言ってやったのですが、考えてみると、私自身よくあそこまで闘うことができたなと思っています。

僕の悪口を言ったNHKのインタビューがあるんですよ。下請けの記者が20世紀の出来事の一つに、動労元委員長の松崎明のところに行って、スト権ストのことを取材した。「あれは富塚の一人芝居だ」みたいなことをいっていたし、山岸章（連合初代会長）もそう言って逃げてしまう。公労協の代表幹事がみんなで何回となく議論して、この道しかないとしてやったものが、今度は「富塚が悪い」（笑）。結末はそうようになってしまったわけです。私は『労働レーダー』に30年のスト権ストを顧みて、まあ、体裁良く書いているつもりですが、そういうことがストライキ権奪還闘争であったのです。世にも不思議なスト権ストと、世間でいわれました。

僕がそれだけのことをやってしまったから、どういう総括をすればいいか。結局、闘いは勝利をした。労働者の団結力はすごい。行動力はすごい。これを未来につないでいこう。私はそういう総括をした。しかし、何も取ることができなかった。無駄なストライキだった。今度は反面、そういう総括をする人たちも出てきました。しかし、それでも翌年、民間単産の私鉄総連や全国金属などがいち早く僕を総評の事務局長に推薦してくれました。スト権ストがああいう結末になれば、本当は事務局長にはなかなかならなかったのではないかと思うのですが、それを事務局長に推薦していただき、楨枝さんと官官コンビということになり、開かれた総評づくりということでのいろいろなことを考えました。

#### 開かれた総評づくり 1

ご案内のように、第2次石油ショックから経

済がずっとだめになってきて、やはり国鉄親方日の丸攻撃がどんどん進み、分割・民営化の流れも出来てきたわけですが、春闘は1954年、太田さん時代に八つの民間の組合が始めています。その後、中立労連（中立労働組合連絡会議）も加わり、主役は総評と中立労連ということになってきました。総評は鉄鋼、中立労連は電機、同盟は賃闘（賃金闘争）といって春闘とは一線を画していたわけです。ご案内のように太田薫と池田総理が会見し、ヨーロッパ並みの賃金を出せというところの春闘の中で、民間賃金に反映させるのを官公労働者にも反映させようということになったのが1963年です。

春闘は、総評がイニシアティブをとっている間は労戦統一の問題もあまり起こらなかったわけです。つまり、春闘でこういうことを考えてみました。鉄鋼労連は一発回答というのを毎年やります。これは宮田さんという大ボスが官公労とは一線を画して、「俺が日本の相場を決める」と言って鉄鋼の一発回答をやった。それから電機、自動車がついて行くのですが、その流れに上積みしようとして私鉄総連を焚きつけて国労と私鉄総連で交通・運輸共闘をつくり、私の出身は国労の東京地方本部で国電という戦力を持っているところで、私鉄も国鉄も始発から電車を止めるという戦術を配置し、追い込んでいくやり方をずっととってきたわけです。

私鉄は関西が強いんです。当時、なかなかまとまらなかった。私鉄は関西を頼ることができない。私鉄がある程度のメドをつけたら、これも今だから話せるのですが、労働省の道正労政局長が赤坂の料理屋の3階に陣取り、私と公労委（公共企業体等労働委員会）の金子委員長という連絡役を置いて、「どういう回答をするなら国電ストをやめることができるのか」。そういうところの勝負をするわけです。私は、後でも話しますが、マスコミの関係者をずっと味方に

付けた。朝日、毎日、読売、共同通信、NHKの5社の政治部の連中が富塚番になっていて、その連中と徹底して相談をするわけです。ご案内のようにマスコミの世界も権力社会ですから、政治部の記者でも内閣とか自民党持ちとかはものすごくかっこつけている。労働担当というのはランクが下みたい(笑)。それをどのように盛り上げてやるかをお互いに相談するわけです。

実は渋谷に戸川昌子(1933～推理作家、シャンソン歌手)の経営する「青い部屋」という店がありました。戸川昌子は私が総評事務局長のときに、年末の各界代表歌合戦で審査員をやって僕に優勝をさせてくれたので、「青い部屋」で打ち合わせをしたのです。締め切りが終わってから夜12時ぐらいに新聞記者が集まり、自民党の情報は、官邸の情報は、といて情勢を分析するのです。そこでストライキをやるということを決めなければ、やはり記者も記事にならない。だから、必ず国電をストライキに入れますと。4時からですから、問題は、いかにしてラッシュを回避するかということに行くわけです。

新聞はもう2～3日前から「ストライキに突入か」というのを一面トップに考えているし、テレビでもやる。そうすると各社の政治部ももっぱらそこに集中している。だから、大体ラッシュは回避する。それならあまり国民の批判も反撃もないだろう。国電の始発の朝4時ですから、4時から始まって大体2時間ぐらい入って6時ぐらいに収拾すれば、ほとんど国民の足にも影響がないというか、多少はありますが、分かってもらえる。そういうことで、公労委の調停案をつくるのにどこまで行っているとかどうとか、全部電話が来ますから、労働官僚と一緒に「じゃ、ここで手を打ちましょう」。そこで大体報告をして、春闘の終結をす

ることにしたのです。それでその調停案を出させて、それを地区の最低賃金に波及させる。地域のほうにも全部それをさせるやり方をしたわけです。それをやっている間は総評がずっとイニシアティブをとってやることができたと思います。

つくづく考えてみると、メディアの世界も同じですし、官僚の世界も同じ。労働界の世界も同じですね。だから、腹を割ってざっくばらんに話をして、こういうことだという情報をみな出し合い、新聞記者の中でもいろいろ議論をする。しかし、国電をストップさせるストライキに突入するという記事は、夕刊も朝刊もトップになりますからね。スト回避かどうかというのがみなポイントになるから、そこで労働担当の記者の株がずーっと上がっていった。残念ながら、いま連合が何を言ったってベタ記事ですよ(笑)。何を行動したって全然書かないんです。労働省クラブはもう全然レベルが……。政治部の記者になると、もっぱら官邸とか自民党とか、そちらが主役を担っているということです。

私はあの春闘の中ではそういうことをやりました。また、国民春闘という中では、労働者のエゴというふうにはばかり取られないためにも、国民の諸要求ということで、生産者米価とか、生活保護とか、社会保障制度の問題とか、あるいは運賃値上げ反対とか、公害追放とか、幾つかの要求を取り上げ、それも要求の一つにして大衆行動も組織し、春闘を成功させてきました。それが国民春闘ということで、社会的にもある程度評価されたと思います。

#### ポーランド改革の旗手ワレサ\*氏と連帯

開かれた総評づくりということでは、たまたま運が良かったのはポーランドの「連帯」のストライキがあったわけです。1980年にポーラ

ンドのグダニスクのレーニン造船所でストライキがあり、世界中大騒ぎになりました。それにいち早く私は目をつけ、なぜ社会主義社会でストライキが起きるのか、そういう疑問を持ってワルシャワに飛びました。

多摩美術大の工藤幸雄先生が、養子にした梅田君というのがポーランドにいるというので、梅田君を頼りにして、東北大の大内秀明先生（1932～）、東洋大の新田俊三先生（1931～2002）、それから高木郁朗先生（1939～当時、山形大学助教授。後、日本女子大学教授）、ずっと総評に協力してもらった先生たちと一緒に飛びました。ワルシャワに飛んでワレサ氏に会うことができました。ただ、行くまでの間にはソ連の全ソ評議会という組合が妨害をして、ずっとシェレメチェボ空港に止められました。この空港で夕飯をごちそうしてくれて、ポーランド行きの飛行機に乗ろうとしたとき、「成功を祈ります」と言って立ち去り、プロペラを故障させて飛ばさせなかった。情報をどこでつかんだか分からないけど、そういういたずらを全ソ評議会にされたのです。しかし、うまく潜り抜けてワルシャワのある教会のところでワレサ氏に会うことができました。そうしたらワレサ氏は、「私は労働条件でストライキをやったのではない。この国の体制を変えるためだ。国民は今のままでは良くならない。だから日本のようになりたいのだ」とさかんに言うわけです。38歳の、髭を生やしたワレサ氏というのはすばらしい男でした。私はそこで共鳴をして、じゃ応援をしようとする約束をしました。

総評会館も私の時代につくったのです。太田

\* Lech Wałęsa (1943～) ポーランドの労働運動指導者・政治家。1980年、全国的な自主労組「連帯」を組織して議長となり、政府の弾圧に抵抗。共産主義政権崩壊後の1990年、大統領に選出。1983年ノーベル平和賞受賞。

薫さんや岩井章さんには「富塚は何でも新しいものが好きだ」と悪口を言われましたが、駿河台に8階建ての会館をつくりました。そのこけら落としに「連帯」の幹部10人とワレサ氏を招待しました。やはり出国できるかどうか、ものすごく心配しましたが、うまく抜け出してきました。成田空港はかつてないマスコミ関係者が500～600人ぐらい来たのでしょうか、ワレサフィーバーになり、ポーランドのストライキは何が目的なのか、全国民が注目しました。NHKでも特別番組を組んでいただき、私と解説委員長とワレサで1時間ぐらいやったことを覚えています。全国がワレサフィーバーとなり、それはたいへんなもので、先駆の役割を果たした総評に注目が集まりました。

その後、ワレサ氏は、共産党の大統領ヤルゼルスキに軟禁されたのです。午前中は水仕事、午後は教会にいる。教会に資金カンパを持って2回ぐらい行ったことがあります。その後、3,000万ポーランド人のうち1,000万人が加入した国民的「連帯」という組織をつくります。たまたまローマ法王のパウロ二世がポーランド人で、彼は敬虔なるクリスチャンですが、彼の応援を得て大統領に立候補し、見事に当選します。4日後に僕が大統領官邸を訪ねたら、2,000人ぐらいいた大統領官邸の護衛を全部退去させ、大統領の部屋を全部オープンにして会ってくれました。非常に体を張ってやったという意味では、私は自分のスト権の経験がありますから、共鳴をして仲良くなり、その後もずっと付き合っただけでワレサ氏の家へ行ったりもしました。今は引退をしてグダニスクにいるようです。

私はちょうど80歳になった3～4年前に、ポーランドの民主化に貢献してくれたということで、ポーランド政府から十字型功労勲章をもらいました。今の日本大使はワレサの通訳で来た女の人です。そういうことでポーランドの

変革が東欧の変革になった。ワレサは日本にも  
のすごく好意をもって「日本のようになり  
たい」とあまり言うから、「日本は資本主義だ。  
労働者は大事にされないんだよ」と言ったこと  
があります（笑）。ワレサ大統領になり、ちょ  
うど村山内閣のときに国賓でワレサ大統領夫妻  
を呼びました。そのとき私は落選していたので  
すが、招待をされました。

ワレサは敬虔なるクリスチャンです。バッジ  
を見たらあったのですが、彼はバッジを胸に常  
にしているんですね。日本に呼んだときも、ロー  
マ法王が狙撃されたというので一晩中寝ないで  
心配していたぐらいです。実は、このバッジを  
付けて宮中晩餐会に出たときに、「このバッジ  
は何ですか」と聞かれたら、「これは二つしか  
ないもので、一つは一番仲のいい富塚にやった」  
とワレサ氏は宮中晩餐会で言いました。その次  
の日、ポーランド側の返礼によるパーティーを  
迎賓館でやったところに天皇も来ました。僕も  
初めて5分間ぐらい天皇と乾杯をしたのですが、  
「ゆうべ、あなたのことを話していました」  
と、バッジのことをよく言っていました。天皇  
は年代も大体変わらないから、よく私のことを  
知っていてくれました。選挙運動には使えない  
けど（笑）、そんな思い出があります。そうい  
う意味でワレサ氏というのは、38歳で天下を  
とってきちんとやるまでよく頑張ったなと思  
います。連帯が大勝して新しい時代ができたこ  
とは事実です。だから、ワレサ氏とは思い出はた  
くさんありますから、今もいろいろ思い出して  
いるのですが、そんなことがありました。

ただ、その中で一つ不思議に思うのは、ソ連  
のゴルバチョフがペレストロイカの政策をやり  
ました。あれは、僕はものすごく評価している  
のですが、あれはどうだとワレサ氏に聞いたら、  
「あんなものはあまり評価せん。ソ連は大嫌い  
だ」（笑）。ポーランドがソ連に弾圧されてきた

経験から、ワレサ氏はソ連を憎んでいたよう  
です。日本に呼ぶときも、寒い国は通りたく  
ないと言って、わざわざロシアを經由しないで  
南回りで来るぐらいのアンチ・ソ連でした  
ね、ずっと。しかし、東欧の変革で多くの東  
欧諸国が民主化をして今日の東西対立がな  
くなったということは、やはり総評がポー  
ランドを支援したということがある。「連  
帯」ができた組合の事務所には何もな  
かったのです。

そこで、まず帰ってきてから印刷機械とか、  
いろいろなものを送って事務所の体裁をつ  
くってやったり、カネがないから総評が  
カンパを集めて送ったり、全部してやり  
ました。だから、ワレサ氏には感激さ  
れて、第1回の「連帯」大会では3,000  
人ぐらい集まった中で僕が最初に紹介  
され、抱き合って……。そういう感激は  
忘れられないですね。ワレサ氏と話し  
てみると、人間的に非常にロマンチック  
なところもあるのですが、ここぞとい  
ったときには突き進んでいく。付き合  
っていて、そういう男だったことにも  
ものすごく感銘を受けました。叙勲の  
問題では、黒川武さん（私鉄総連、総  
評議長）でも真柄栄吉さん（自治労、  
総評事務局長）でもみな勲二等をもら  
っています。私とか榎枝さんはスト  
ライキまでやっているからとても叙勲  
の対象にはならないけど、ポーランド  
の十字型功労勲章をもらったことは、  
別の意味でもものすごく誇りに思  
っています。

## 開かれた総評づくり 2

開かれた総評ということでは、トーク  
インなどをやって国民各層から意見を  
聴いたり、いろいろなことをやりましたが、  
東欧の変革に参加したり、それから反  
戦平和の闘いで頑張ったり、そうい  
うことで総評に対する見方がまた変  
わってきた。自賛するのはおかしい  
のですが、大体そのように考えていま  
す。総評会館を今度連合



会館にしていいたかと言うから、私も迷ったのですが(笑)、「いい。時代の流れだ」。それで連合会館と変えましたが、「僕が書いた定礎だけはなくすなよ」と言って、いま入口にあります。

率直に言って、開かれた総評づくりにいろいろ腐心しました。結局、内部の問題だけやっていただけだ、国民的課題としてやるということで、1982年の国連軍縮総会に向け、1,000万人署名とか、広島に焚きつけて地区労が20万人集会、東京で30万人、そして大阪では40万人集め、大集会を成功させました。そのときの主役が沖縄の県会議員の玉城君といって、国民運動を通じていろいろ計画をした人です。今度11日に、総評に呼んで沖縄問題を考えて講演してもらうことにしたわけですが、反戦平和の闘いとか、ポーランドの問題とか、国民諸要求の解決のために頑張るとか、いろいろな戦術を駆使したことで、その後の落ち目の総評を何とか救い上げてきたように思います。

#### 労働戦線統一問題

次に、労働戦線統一問題について申し上げます。総評が450万人、同盟が220万人、中立労連が130万人、新産別(全国産業別労働組合連合)が5万人。当時、これが労働4団体でした。先ほど言ったように、春闘では総評が主導権を握ってきました。労働戦線統一問題は全通の宝樹委員長も早くからぶち上げていましたが、組織的にくすぶっていたことは事実です。しかし、総評が春闘の主導権をとっている間は表面に出ませんでした。ところが、低成長になって先ほど言った保守側の攻撃もあり、そして官公労親方日の丸攻撃で、今度は民間の組合の同盟さんも政府・自民党と一緒に動いて動き出す。実はそれに頭を抱えました。それで政策推進労組会議とか、賃金対策連絡会議とか、民間の組合に

月3日かな、「労働戦線統一推進会の基本構想」というものが示されたのです。いったいどうすればいいか。とにかく総評を解体することには絶対に反対だし、どのように対応するかということ、頭を痛めました。

そこで私は、この「基本構想」の問題からうまく逃げることを考えようと思って「補強五項目見解」を出したのです。1番目が国民春闘の継承・発展。2番目が反自民・全野党共闘の推進。3番目が組合ごとの選別は反対。4番目が中小・未組織労働者の運動重視。5番目が企業主義の克服。こういう5項目の補強見解を出して、今でも忘れられないのですが、81年の11月4日に九段会館で臨時大会をやりました。超満員になりましたが、私が提案しても一人も発言しない。一人もヤジを飛ばさない。みんなシーンとしている。これはいったいどうなるのか。総評解散をせざるを得ないかなと思うぐらい追い詰められたような雰囲気でした。私はそこで水割り論をやった。今のような焼酎ではなく当時のウイスキーの水割り論です。主体性があればウイスキーが濃い。主体性がなくなれば水のほうが多くなる。だから、労働戦線統一問題ではとにかく水割り論をやり、総評の主体性確保を訴えました。しかし、結論は出ませんでした。

その後に結局、総評の中でも全日通さんとか、電通さんとか、賛成する組合がありましたから、今度はそれをまとめるという意味でいろいろ腐心をしました。中川豊氏という総評副議長、全日通の委員長を代表に出し、これは避けて通れない問題になるだろうということで話を進めることにしたのですが、私は共産党の宮本委員長にも直訴しました。宮本委員長は理解を示して、「あまり急ぐことはない」という返事だったのです。しかし、共産党系の統一労組懇はまるっきり反対。この勢力が3分の1いますから、皆さん反対です。あとは国労をはじめ左派系のみ

な反対だし、いったいどうしてこうかということを考えているうちに、最終的には僕らは真柄さんや黒川さんにタッチして代わってしまったわけです。

結局、労働戦線統一は避けて通れない。しかし、私も世界各国いろいろな組織を回りましたが、外国の労働組合はフランスのCGT、イタリアのCGILなども産業別組織がしっかりしているんですよ。日本はその産業別組織が中途半端です。産業別組織がしっかりしていれば、労働組合の組織はうまくいくわけです。いま連合さんにはそういうものがないところが欠点ではないかと思っています。

皆さん、今の連合さんを見ていてどうですか。もう情けなくて。総評のOB会から、もっと連合は頑張らなければいけないとあって、あちこちから電話が来たり手紙が来たりします。私は夜寝るときは「よし、やってみようか」と思うけど、朝起きたら、「今の状況では何をやってもとても無理だ」という気持ちになります(笑)。結局、労働運動というものを社会にアピールすることに欠けているんですね。その点では、先ほど言ったマスコミ対策などもほとんど新米の記者が行って、書いてもみな社ではボツにされているような感じです。だから、何かアクションを起こして話題を提供する。市民団体と提携して国民のニーズを生かしていく。高齢者社会とか、あるいはTPPのこともあります。いろいろな問題が山積しているのに、要求として政策をつくり、それを実現するための行動を起こしていくことが全然ないんですね。連合に入ると毎日会議室はいっぱいで、朝から晩まで会議をやっている。何の会議をやっているのか(笑)。

残念ながら、政労使で政府から賃上げしろなんて言われて、労働組合が歓迎しますなんてやっている(笑)。それは基本的には労使関係が決める権限であり、労働基本権というのは憲法に保障されているわけです。そういう原点に立つことの点検がないから、結局はズルズル、ズルズルと行く。古賀伸明さん(現在の連合会長)とも仲はいいのだけでも、何かあの人一人が振舞っているだけで、あとは担当の部局が毎日、会議をやっている。私の秘書をやっていた岡野栄君とか芹生琢也君とかみな政策局長とかやっていたのです。そこで私が「何をやっているんだ」と言うと、「連合というのはどうにもならない。まとまらないんだよ」って(笑)。集まって会合はやるけども、それで終わりですよ。会合だけです。だから、地方に行って資金カンパ活動をやって政治活動の拠点をつくれなんて言っても、なかなかそうはいかないのではないかと。総評は真剣になって社会党を支えてきたし、その流れで民主党も一つの流れが出てきている。政権もとった。しかし、原点の政治活動の拠点をしっかりとつくっていくことにもっと力を注がなければ、これから再び政権をとるなんていうことは絶対にできないのではないかとと思っています。

そういう意味で、労働戦線統一問題も果たして良かったのかどうなのか。総評がなくなって社会党がなくなったと言われていています。しかし、こういう一つの歴史の流れであったということは紛れもない事実であります。ちょうど1時間半になりましたから、大体の問題点を申し上げ、あとは皆さんからご意見を賜れば幸いと存じます。十分になったかどうかは別ですが。(続く)